Vol.154　市史編纂（さん）だより

わがまち歴史散歩

江戸時代の村にとって山の意義は？

○村自立の基盤

江戸時代、村は本村・支村の関係を除けば、多くの場合自立していました。しかし、決して孤立してはおらず、相互に不足する物資や、ときには知識を補い合って、村と村、あるいは村と町の関係の中で主体性や自立性を維持していたのです。

どの村でも、これらを確保するため、生産力を維持することをめざしました。もちろん、田畑と屋敷地あるいは水利施設などがその中心でしたが、それだけではなかったのです。集落を取り巻く山や川・湖といった自然の広がり、そして近隣の町も大事な存在として相互に依存していたのです。

今回は、山の存在について村々の古記録をひもといてみることにします。

○畑村本庄前山と裏山をめぐる入り会いの記録

そもそも、山はどのような意味で重要だと当時の人は考えていたのでしょうか。

池田市畑地区は、江戸時代には畑村あるいは東・西畑村でした。畑村の北部は山地が広がり、集落に近い方を本庄前山、奥を裏山と呼びます。『新修池田市史』第2巻では、この山地の利用をめぐる周辺村々の権利と義務＝入り会い関係の調整がいくつか紹介されています。すなわち、元禄5年（1692）作成の「取替し申す一札の事」、享保期（1716～1736）における裏山での耕地への転換地7町歩の開発をめぐる村々のやりとり、そして、享保11年の山株設定のことなどです。

しかし、改めて当時の文書を読んでみましょう。ここでは牛飼場としての山の草場をめぐる史料を取り上げてみます。

○牛の飼育と山

牛は、農耕にも、荷物の運搬にも大きな力を発揮しました。その牛を飼育するため村では本庄裏山の中に「牛飼場」といって広い草山あるいは草場を設定していました。

畑村に残る史料を見ると、延宝6年（1678）畑村の「御小物成所検地帳」に「柴山8町6反3畝10歩」と並べて「芝山124町8反3畝10歩」と記載されています（西畑町内会管理文書）。ちなみに、宝暦9年（1759）4月作成の畑村本庄山小物成絵図では、この「芝山」が牛飼場であることを窺わせる草山の相貌が描かれ（西畑町内会管理文書）、宝暦12年には渋谷村との間で草場の利用を認める代わりに田・畑・屋敷地以外に掛かる6斗3升余の小物成の納入を約束すると取り決めています（岸本晃家文書）。さらに、寛政12年（1800）8月には畑村内の小字鳥塚ほか3カ所の草場を東西両畑村で分割する取り決めを交わしています（西畑町内会管理文書）。つまり、畑村では17世紀半ばには牛飼場が山の中に設定され、その利用をめぐって近村との間で約束を交わし、やがて村人同士の利用方法も変更していくのです。

○史料を注意深く読むこと

『新修池田市史』第2巻の表「市域村々の村明細帳からみる農業および村況」には、中河原村（天明7年＝1787、文政10年＝1827）・木部村（宝暦7年＝1757）・東山村（延享元年＝1744、宝暦6年＝1756、明和8年＝1771）と、当時数軒に1頭ぐらいの割合で所在した牛の数が書き上げられています。当然、牛飼場はどこかと気になるでしょう。

山は村の生産維持にとっていかに重要だったのか、それをめぐってどのように他村との関係を築き、ときには紛争を招いたのか、史料を注意深く読んで想像してみたいと思います。もちろん、その結果は「里山」としての姿を物語ることともなるでしょう。

（市史編纂委員会委員長・小田康徳）

畑村本庄山小物成絵図（西畑町内会管理文書）

◆問い合わせは生涯学習推進課☎754・6674